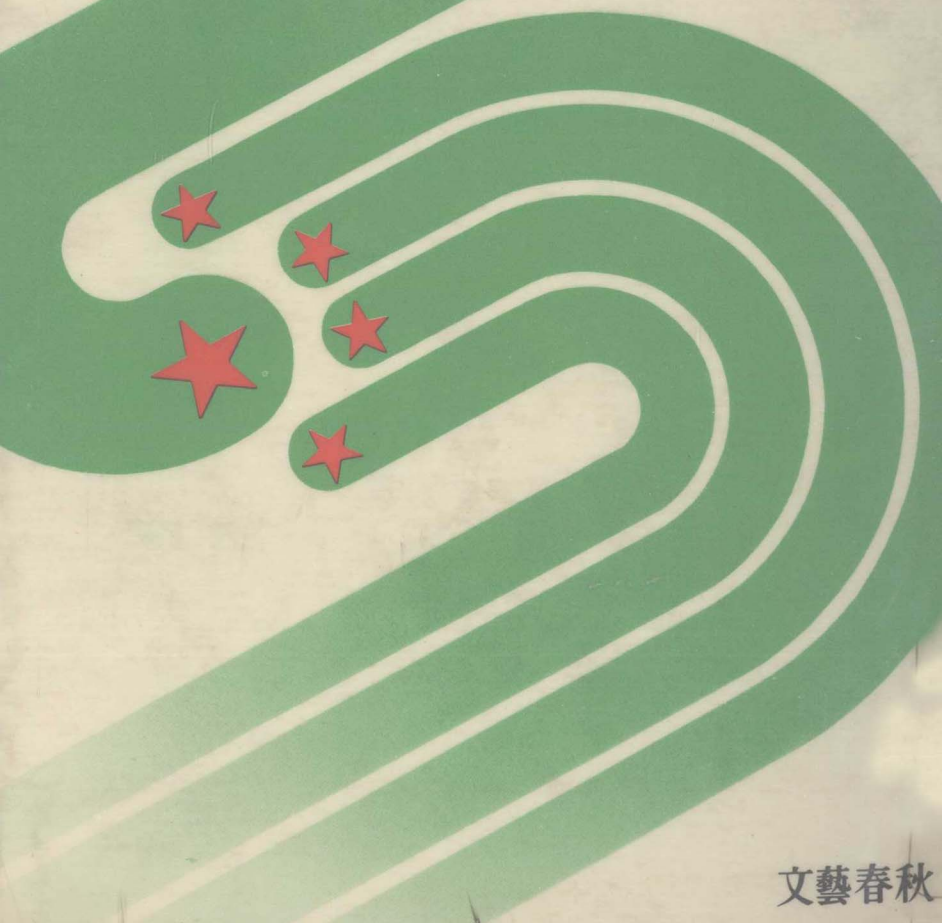


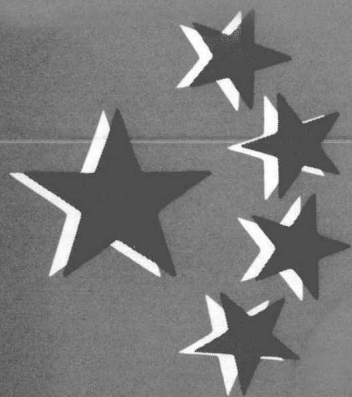
中国見たまま

杉森久英



文藝春秋

中国



杉森久英

著者略歴

明治45年石川県に生る 昭和9年東大卒
中学教諭 中央公論社員 河出書房社員
を経て文筆業に入る 昭和37年「天才と
狂人の間」で第47回直木賞受賞
著書に「徳田球一」「苦悩の旗手太宰治」
「大風呂敷」「啄木の悲しき生涯」など

中国見たまま

昭和四十七年七月三十日 第一刷

定価 六八〇円

著者 杉 森 久 英

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷所 共同印刷
製本所 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© 1972 Hisahide Sugimori

Printed in Japan

0026—332360—7384

中国見たまま／目次

広州から北京へ……………5

西安から上海へ……………84

杭州から長沙へ……………159

帰ってから……………223

装帧
安彦勝博

中国見たまま

広州から北京へ

大英帝国の爪の先

羽田の空港には、春の朝らしい、ひんやりした空気が流れていたが、香港へおけると、とたんにむうつと生あたたかい風が吹きつけて来た。日本の気候でいえば、梅雨が終って、本格的な夏に入りかけたころの気温である。

いったんホテル（金門飯店）へ入って、一休みしてから、町へ見物に出かけた。一行は武田泰淳、永井路子、尾崎秀樹の三氏に、日中文化交流協会の木村菊男氏である。

道路はきれいに舗装されていて、手入れがよく行き届き、三十階建て、四十階建てのビルディングがならんで、近代都市らしい美観をなしている。

商店の構えが立派で、ショーウィンドウの品物も、銀座あたりよりも高級なものばかりである。

「女の人の着ているものが、みんな注文品ばかりですわね」

と永井さんが女性らしい観察をくだした。この小さな島に蓄積された富は、はかり知れぬものらしい。

頑丈な鉄柵にかこまれた、広い敷地の中に、石造のがっしりした建物が見えるのは、英国総督の官邸であらう。東京の英国大使館と同じ建築様式である。灰白色の大理石の積み重ねかたや、円柱の組み合わせ、柱頭の飾りなど、よく似ている。

そういえば、私は一九七〇年、クエートでも、サウジ・アラビアのジェッダでも、似たような建物を見た。前者は英国の Political Agent (政治代理官) の官邸、後者は大使館だということであった。ジェッダの大使館は、国王の宮殿と隣り合っていて、中にゴルフ場があるくらい広大なものだった。大英帝国は、世界の各地にこのような建物を作って、世界制覇の拠点としたものであらう。

香港は、大英帝国が中国大陆へ打ち込んだ爪の先である。そして、そのあらゆる機能の中枢が、この総督官邸であった。

この官邸から、たった一度だけ、英国人が追い出されたことがあるのを、英国人は忘れないだろう。

数年前のことだが、私は房州一宮に隠棲している元中将磯谷廉介氏を訪ねたことがある。家は

もと將軍の舅の上原勇作元帥の別荘だったそうで、海岸の砂地に建てられた質素な平家建てだったが、客間の壁いっぱい、軍服姿の將軍の立像を描いた油絵がかけられていた。高台の上の洋館の窓から、下の町を見おろしているところで、將軍の説明によると、大東亞戦争のはじめ、將軍が香港占領軍の司令官になって、英国総督官邸を接收し、そこに寝起きしていたころの姿を、画家に描いてもらったのだということであった。おそらく、磯谷氏の生涯のうちで、もっとも得意の一時期だったのであろう。私を將軍のところへつれていったのは、もと將軍の部下のO大佐だったが、この絵の前で、今は平凡な田舎の老人になってしまったこの画の主にむかって、O氏が直立不動の姿勢で、「閣下、閣下」と呼んでいた光景は、今も記憶にあざやかである。

しかし、日本の敗戦とともに、英国人はこの官邸を取りもどした。いま、中華人民共和国は、民族の誇りにかけて、この島から英国人を追い出そうと、やっきになっている。それはいつできるだろうか？　それが実現する日が、アジアの歴史の新しくなる日だろう。

この島を統治しているのは英国人だけれど、実際に住んでいるのは中国人である。だから、いたるところに、中国の色彩と匂いがあふれている。

この国は、どこへいっても赤と緑の氾濫である。港を走りまわっているランチやモーター船は、船体を緑に、船室を赤に塗り分けてある。町角に客を待っている人力車は、車体を赤く、幌を緑に塗ってある。バスも赤と緑である。

むかし神田の学生街をあるくと、戸や柱を緑と赤に塗り分けた中華料理屋があったものだが———そういえば、今日でも、ラーメン屋やギョーザ屋の赤と緑は珍しくないが、いずれにしろ、よくよく赤と緑が好きなのは人種である。この赤と緑の配合の持つどこか執拗な、精力的な感覚は、彼等の体質から来るのであらう。

むき出しの民族的敵意

あくる朝、九竜の停車場から羅湖にむかう。同じホームの向うに、十人ばかりのにぎやかな一団がいる。栄養のよさそうな、元気のいい中国人紳士である。大きな声で何かしゃべっては、どつと笑い崩れている。案内の中国旅行社の男が、

「香港の代表的な金持ちの華僑たちです。明日からひらかれる、広州見本市へ出かけるのでしよう」

という。

一時間ばかりで羅湖へつく。ここが英領側の国境である。出国の手続きをする間、応接室の小さな小部屋で待たされる。

壁には、ヴィクトリア女王の等身大の肖像がかかっていて、ここはまぎれもなく、英領である

ということを思い知らされる。

しかし、窓から外へ目を向けると、すぐ先に金網の仕切りがあつて、その向うは中国領になるらしく、倉庫か事務所のような建物の横っ腹いっぱい、

「すべての反動派は張子の虎である」

とか、

「偉大なる領袖毛主席万歳」

とかいう標語が書いてある。この部屋にいと、窓をしめないかぎり、いやでも見ないわけにいかないで、書いた方は痛快だろうが、見るほうは、隣の物干しからきたない洗濯物をぶらさげられたみたいに、いまいましいだろう。こういうむきだしの民族的敵意は、これから先中国のどこへいっても、まざまざと見せつけられる風景であつた。

ところで、この時から四年後の今日、新聞やテレビのニュースの伝えるところによると、アメリカの卓球選手たちが中国へ招かれて、各地できわめて友好的に試合をしたということだが、国内いたるところの壁面や屋根に大きくかかげられた反米的な標語は、どうなっているだろうか？ 世界中のどの民族よりも来訪者を厚くもてなす道を心得ている中国人のことだから、そこはぬかず、消してしまつただろうか？ それとも、米人選手団の中には、中国語の読める者はほとんどいないだろうから、目にふれても大丈夫と、そのままにしてあるのだろうか？

それよりも、革命成立以来二十年にわたって、人民の中へ吹きこんで来た反米感情を、中国政府はこれからどういう方向へ導いてゆくつもりだろうか？ 佐藤政権は敵だけれど、日本人民は味方だという論法と同じで、アメリカ帝国主義は敵だけれど、卓球選手は友人だから歓迎するというつもりかも知れないが、これまでの中国政府のやり方は、卓球選手だろうが何だろうが、アメリカのものはすべていけないといって、門戸をとざすといった風だった。ところが、最近の中国の出方を見ると、スポーツだけでなく、いろんな面でアメリカと和解してもいいと考えているかのようなのである。そうなると、これまでアメリカをあんなに激しく攻撃していたのは、うそだったかといいたくなるが、その点については、中国は何とも答えない。ただ全体として、中国はこれまで敵視していた世界の資本主義諸国へ、すすんで微笑を送り、和解の手をさしのべようという気になっていくらしいとだけ、はつきり言えそうである。これは今後の世界の大きな課題となるだろう。

しかし、四年前、私たちが中国を訪ねたとき、今日の状態を予測させるような気配はまったくなかった。中国は米帝国主義やソ連修正主義をきびしく非難し、罵倒しつづけていた。もちろん、日本の保守政権も槍玉にあげた。私には、中国はこのまま世界中のあらゆる資本主義国と敵対関係を続けてゆく覚悟のようにしか思えなかった。中国全土、いたるところに、激しい排外感情が燃えさかっていた。

中国革命発祥の地

入国手続きがすむと、国境の川にかけられた鉄橋を歩いて渡る。線路の両側は金網でかこつてあつて、私たちはちょうど金網のトンネルをくぐっているような形である。

鉄橋を渡りきると、むこう側も駅になっていて、工人帽に工人服の人が親しげに迎えてくれる。広州の作家協会の人たちだという。

駅の食堂で昼食をとる。

食後、屋上のサンルームのようなところへ案内されると、日本人の商社員らしいのがたくさん集まっている。さっきは気がつかなかったが、やはり広州の見本市を見るため、同じ汽車に乗つて来たらしい。

やがて、十人あまりの青年と少女の一隊が、赤旗を先頭に入つて来ると、一列にならんで「毛沢東語録」を斉唱した。男も女も、バンドのついた軍服みたいなものに身をかためている。

つぎに、音楽に合わせて、剣舞と盆踊りをまぜこぜにしたような、勇壮な舞踊がはじまる。舞踊の振りには簡単で、拳を振り上げて見得を切ったり、刀をふるってエイと斬ったり、倒れた敵を矛で突いたりするところである。倒れた敵を突くところは、わが国の炭坑節の踊りの地面を掘る

しぐさを連想させる。幼稚なヒロイズムのような気がするが、この国の人民にとっては、偽りのない愛国的感情の表現なのであろう。

二時ころ、広州ゆきの汽車に乗る。車輛は、できたばかりのときは豪華なものだったろうが、座席のビロウドは擦り切れ、バネはいたみ、金具の塗りも剥がれているという、相当の古物である。日本ならとくに廃物になっている代物だが、こういうのを後生大事に使っているのは、これと同じものを新しく作る余裕がないからであらう。

ボーイが——といっても国家公務員だろうが——日本のすし屋の湯呑みのように大きな、蓋つきの中国風の茶碗に、茶の葉を一包ずつつけて、くばつてあるき、大きな魔法瓶を置いていった。どの客にでもするサービスなのか、われわれが特別に招かれた客だからしてくれるのか、知らないが、親しみのこもったやり方である。

しかし、魔法瓶の胴に描かれたバラの花の粗末なものには、気の毒な思いがする。吹きつけた塗料が悪いのか、技術が劣っているのか、色も冴えず、むらむらになっていて、夜店で売っている安物といったところである。蓋や注ぎ口や把手の金属の仕上げも、粗悪でガサガサしている。

広州の駅では、西園寺公一氏がプラットホームまで迎えに出ていて、ひとりひとりに親しく握手してくれる。ふだんは北京にいるが、見本市の期間中は広州へ来て、訪中の日本人の面倒を見るのが仕事らしい。

武田泰淳さんが、

「御苦労さまです」

といったら、

「いえ、宿屋の迎え番頭ですよ」

といって、にこにこ笑っている。迎え番頭にしては、大物中の大物だろう。客の方が小物で、申し訳ないみたいだ。

駅前の広場には、榕樹ようじゆの太木が何本も、南国らしい強烈な日の光に、濃い影を地上に落している。榕樹は香港でもよく見かけたが、どっしり落ちついて、町に深々とした気品と静けさをもたらす木である。

このあたりは南国だから、樹木がよく繁って、すくすくと気持ちよく伸びている。大通りをあゝるいても、日本でいえば樺けやまに似た太木が、文字通り亭々とそびえていて、雄大な風景である。

この町は中国革命発祥の地である。

清朝のころ、この町は中国大陸唯一の開港場であった。西洋人がはじめて東洋へ来て、清国に貿易を求めたとき、政府は首都北京に一番遠いこの町を交易の場所に指定した。外国と交渉を持つことをあまり好まない国が、やむをえず港をひらくときは、なるべく中央政府のある場所からはなれた場所を選ぼうとするものらしい。日本でも、幕府時代に、オランダや清国の船が入るこ

とを許されたのは、江戸から遠い長崎であったし、安政の条約でヨーロッパ諸国に港を開いたときも、下田より近いところに許そうとしなかった。広州の北京におけるは、ちょうど我が国で長崎の江戸におけるようなものであった。

外国貿易によって、この港が巨大な利を得たことも、長崎に似ていた。この町の商人たちは、国王に匹敵する富をたくわえ、豪華な邸宅に住んで、贅沢三昧に暮らした。

阿片戦争が起ったのも、この町である。大砲と小銃という近代兵器によって武装されたイギリス遠征軍は、清国軍隊をさんさんに打ち破って、老大国の眠りをさました。

孫文が生まれたのは、この町の近くの香山翠亨という寒村である。のちに彼はこの町に広東軍政府を樹立し、大元帥の地位に就いたが、追われて日本へ亡命し、ふたたび帰って、広東国民政府の非常総統に就任した。

中国ではじめて近代的軍人を養成する学校ができたのも、この町である。忠誠なる革命的軍隊を持ちたいというのが、孫文の夢だったが、それを受け継いで実現させたのは蒋介石であった。彼はソ連の援助を受けて、広州郊外の黄埔に軍官学校を設立した。

この学校について、アンドレ・マルロオは一九二五年の香港、広東における反英ストを描いた小説「征服者」の中で、登場人物のひとりに、次のように言わせている。

「……おれは理屈なしに讃嘆の声をあげるね。支那人を相手にしてさ、そいつを兵隊にするって